

# イワシ類シラスの漁場形成の研究

(我が国周辺漁業資源調査)

(予算区分 受託 研究期間 平成7年度～)

担当：資源海洋科 永倉靖大

## 【研究の背景とねらい】

静岡県におけるイワシ類シラスの水揚金額は年間40億円を超えており、沿岸漁業で最も重要な魚種の一つとなっています。イワシ類シラスについて水揚統計資料の収集、漁獲物の全長組成や卵稚子の分布などの生物学的特徴を把握することで、シラス水揚量の変動特性、漁場来遊群の大きさと沿岸海況の短期変動との関係について検討し、最終的には、シラス漁場形成機構を解明します。

## 【これまでに得られた成果】

(平成28年度の状況)

- 平成28年度漁期(平成28年3月～平成29年1月)の主要6港(静岡、吉田、御前崎、遠州、舞阪、新居)における総水揚量は7,659トンで、前年(8,549トン)の90%、過去5ヶ年平均(7,840トン)の98%でした。
- 平成28年度漁期は3月の解禁当初から、頻発した暖水波及の影響により好漁に始まり、4月の水揚量は本漁期における最大のピークとなりました。5月に水揚量は減少し、その後9月まで低調に推移しましたが、7月に一時的に水揚げは回復しました。10月に水揚量は再び増加し、今漁期において二番目のピークとなりました。11月、12月と水揚量は減少しましたが、1月にはマシラスを主体としたまとまった水揚がありました。
- 漁期前にシラス漁況の長期(1～2ヵ月)予報を行うとともに、漁期中に沿岸海況の短期変動に基づくシラス漁況の短期予測を試み、その結果を漁業者に広報しました。
- 漁期を通して水揚の主体はカタクチシラスですが、近年はマシラスの水揚量が増加傾向にあり、本漁期は645トンでした。これは、マイワシ太平洋系群資源量の増加傾向と合致した傾向です。

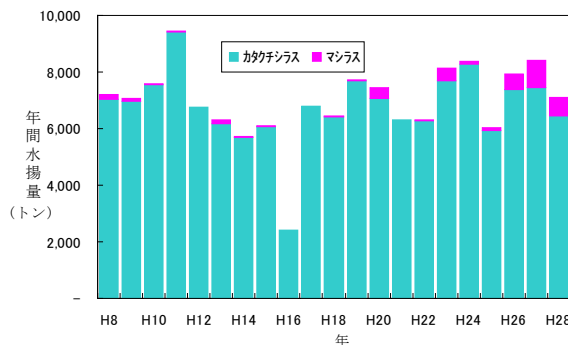


図1 県内主要6港におけるシラス種別推定水揚量の推移(平成16年は黒潮大蛇行で不漁)

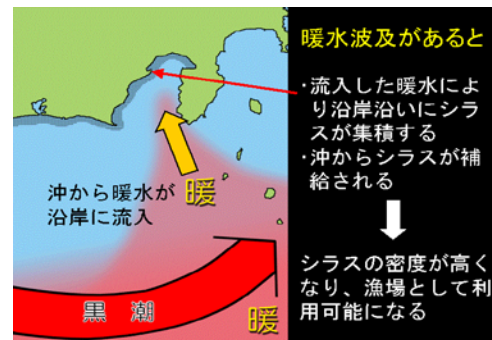


図2 シラス漁況に暖水波及が与える影響の推定模式

## 【期待される効果】

- シラス漁場形成機構が解明され、漁場や漁況の予測が可能になれば、シラス漁業者は計画的な操業が、シラス加工業者は在庫管理等の面で計画的な経営が可能となります。

## 【今後の計画】

- 漁場加入前のイワシ類シラス採集調査によって、種組成や分布状態などを明らかにし、漁場加入に至るまでの機構やシラス漁況との関連について検討します。
- 漁場来遊量と海況との関係を明らかにし、シラス漁況の短期予測手法を確立します。

(作成 平成29年4月)